



茶と花

Cha to Hana

熊倉功夫

Kumakura Isao

井上 治

Inoue Osamu

03

TRƯỜNG ĐẠI HỌC CÔNG NGHỆ
TRUNG TÂM THÔNG TIN TH

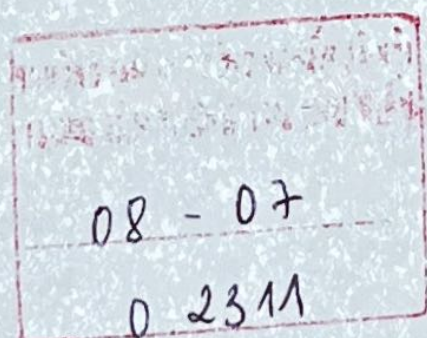


Mã sách: 080702311

日本の
伝統文化
5

茶と花

熊倉功夫
井上治



山川出版社

に湯を沸かして、十分沸騰したところへ茶の粉末を投じ、よく煮てから碗に移して飲む。現代の茶とは製法も飲み方もまったく異なるが、ただ、茶の葉をまず蒸すこと、そして粉末にして飲むことの二点だけは、本来の中国で早く失われていながら、日本にだけ残った抹茶法と一致するといえよう。日本風の緑茶の特徴は蒸すという技法から生まれ、茶道は抹茶の世界に展開したことを思えば、かつて古い中国は日本に残されているのである。

『茶経』とは別に、茶のもつ精神的な効果が、すでに唐代に注目されている。それは盧同の「謝孟諫識寄新茶」（筆を走らせ孟諫議の新茶を寄するを謝す）の詩で「（前略）一碗は喉吻潤い、兩碗は孤悶を破る、三碗は枯腸を搜すに、唯文字五千卷有り、四碗は輕汗を發し、平生不平事尽く毛孔に向いて散ず、五碗は肌骨清く、六碗は仙靈に通ず、七碗は喫し得ず也、唯覺ゆ兩腋習習として清風生ずるを、蓬萊山、何処にかあらん」とある。茶を何碗も飲むと精神的な高揚感が生まれ、心身が浄化されると唐代の人々は考えた。

唐代以後、茶はますます中国で普及した。ことに宋代になると、茶法といわれる茶の税金が国家財政の重要な柱となり、また団茶はさらに精密となって、龍鳳団といわれるように、表面に龍や鳳凰を型押しし、非常に緻密な質を誇る団茶がつくられるなど、茶の文化の最高潮を迎えることになった。日本の僧栄西（一一四一～一二二五）が中国を訪れたのは、ちょうど、宋代の茶の文化盛んなりし頃であった。

はじめに

熊倉功夫

3

第一部 茶

熊倉功夫

11

第一章 喫茶という文化

13

1 中国から日本へ

13

2 喫茶の楽しみ

24

3 会所の茶

32

第二章 茶の湯の大成

38

1 芸能としての茶の湯

38

2 千利休の生涯

51

3 千利休が創造した下克上の茶

71

第三章 生活のなかへ入った茶の湯

1 かぶきからきれいへ

2 遊芸化する茶の湯

第四章 改革・衰退・復活

1 松平不昧と井伊直弼

2 衰退と再生の試み

3 近代数寄者と茶の湯の復活

第五章 大衆の手に渡る茶の湯

1 知識人の参加

2 大衆に支えられる茶の湯

3 茶の湯論の深化

91

91

116

131

131

147

157

173

173

184

199

第二部 花

井上 治

217

第一章 花道文化の源流

219

1 宗教的な花文化

219

2 鎌倉・南北朝時代の花文化

236

第二章 花道文化の形成

253

1 応仁の乱前後の花文化

253

2 文阿弥と池坊

265

3 花伝書の形成

271

第三章 中世の花道思想

288

1 座敷飾りと三具足

288

2 違い棚・付書院の花

294

3 禁忌

301

4 儀式の花・風景描写の花

303

第四章 花道文化の展開

1 池坊の隆盛

2 抛入花の発展

3 生花様式の形成

第五章 花道文化の動揺

1 日本の近代化と花道

2 伝統流派の復興

3 「新興いけばな宣言」と「前衛いけばな」

307 307 327 338 353 361 363

参考文献／関係資料／写真提供一覧／人名索引